シリーズ・開業

26年間勤めたよ

宮本秀明
宮本皮フ科
（横浜市磯子区）

場所と名称

平成17年４月25日に開業した。診療所はJR根岸線洋光台駅徒歩２分で、団地内商店街の中にあり、隣は魚屋と弁当屋である。精肉店の跡地を借り受けたが、契約したばかりの時はまだ「肉の××」という古ぼけた看板が残っていた。そこで診療所名も「皮膚の宮本」にしようかと思い、某先輩に伺いを立てたところ「『おどろきモモの木皮膚科クリニック』がよいでしょう」とアドバイスを受けた。実に良い先輩を持ったものだが、これは実現せず上記の如く平凡な名称となった。

「もう頬づえはつかない」

開業場所を探し始めた頃は今の場所は空いてなかったが、運良く開業の４ヶ月前に見つかった。私にとって良い場所とは「倒産せずしかも患者が来過ぎない」という、誠に虫のいいものであったが「患者が来過ぎる」は杞憂であった。開業直後２～３日は物珍しさで少し混み合ったが、すぐにそうでもなくなり、秋になったら患者は激減、冬は受付時間の半分ぐらいは遊んでいる有様であった。患者が少ないとひ弱な私にとって体が楽で助かるが、冬は暖房しても患者を診てないと懐だけでなく体が冷え込み（特に四肢末端）、だいぶ使い捨てカイロを消費した。午後になると体は温まるのだが眠くなる。頬杖をついて眠り込むとふいに患者が来た時に痕が付いていてカッコ悪いので、背もたれに体をあずけて寛（くつろ）ぐよう心掛けた。

診療時間

理想は「10～12am、3～5pm、木曜、土曜、日曜、祝日は休診」（なんと１日４時間労働で5pm時でお

終い、週休３日）であったが、開業前の打ち合わせでそのように告げると開業コンサルタントの顔が段々曇って来ただけでなく、横で聞いていた妻が柳眉を逆立てた。そんな訳で「9～12am、3～6pm、土曜も半日診療」（なんとか世間並み）となった。診療所は１階にあり、薬局がすぐ隣にある訳でもないのだが、全て院外処方とした。

医学部を選んだ動機

何10年も前のことになるが、中学や高校のホームルームで私が自分の意見を主張すると皆は感心して聞いているかの様に見え反論も殆ど出ないのだが、採決すると40：10で退けられる（10人くらいは賛成してくれた）、ということがしばしばあった。後で考えても他の人の意見よりはやはり自分のアイデアの方が良いとしか考えられず、集団でやる仕事は向かないような気もしてきた。役人や大会社の社員になっても上司と衝突して早晩退職する羽目になるだろうし、それは医学部に進んでも同じことだろうが、医師なら組織を離れても離島か過疎地でプラナリアの様に生き延びていけるような気がした。

よく続いたものだ

以上の様な性格なので、病院勤務は長く続かないと思っていたが昭和54年春に大学を卒業してから平成17年春まで勤務医を続けることが出来た。上司に恵まれたお蔭もあり、運が良かったのだろう。65歳の定年まで勤める気もなかったとは言うものの、やはり勤務していた病院に未練がない訳ではなかったが、思い切って辞めた今は勤務医時代よりは気楽である。ただし倒産しなければ、であるが……。診療所のある団地の商店街もテナントの入れ替わりは激しい。事業などと言うものは左前になるのは珍しくないし、自営業で皆が暮らしていけるなら誰も会社勤めなどしないだろう。医業なら潰れないなどと胡坐をかいていたら大間違いで、初診料も処置料もお上の匙加減次第である。手を拡げる気にはとてもなれない。

開業したらまず「××病院の部長」という根性を捨てねばならぬ。薬品、液体窒素、消毒薬、スライドグラス……等、減り具合を見て自ら発注せねばならない。勤務医時代はただ同然に思っていたトイレットペーパーや水道代も当然金がかかる。

開業すると患者に対してだけでなく、製薬会社に対しても「食わせてもらっている」と言う意識が発生した。勤めていた頃にはなかった感覚である。勤務していた病院が遠かったこともあり、そこから患者を引っ張ってくることは念頭になかったが、今までに元患者、元患者の家族、病院の職員の家族も少数ではあるが受診してくれた。

開業直後

開院して４ヶ月位したら、患者を診ていて不愉快になることが開院直後よりも少なくなった。どんなDrか様子を見に来た患者のうち、私の診療が気にいらなかった人が来院しなくなったせいもあるかも知れぬ。小生が苦手な患者（顔の相談で化粧を塗りたくりしかも落とすことに同意しない人、重症でもないのに１人で長々粘る人、重症のアトピー性皮膚炎で薬だけくれと言う人、録音装置持参で「治ることを保証しろ」と言う人、等）は、正統派の意見を言っていたらすぐに姿をみせなくなった。

広告費用

開業すると広告業者がハイエナの如く寄って来た。よい物件は空いておらず、売れない物件から先に持って来るので注意が必要であり、それから、言い値でなく値切ることも大事である。必ずと言っていいほど値引きするものである。

インターネット広告の誘いは全て断った。既に県皮膚科医会や区の医師会のHP（ホームページ）もあればタウン誌や製薬会社関連のHPもある。これ以上金をかける事もない。

広告にどれほどの効果があるのだろうか。開業後年月が経てば結局は口コミだろうか。しかし最寄りの駅に宣伝が全くないともぐりの診療所みたいなので、仕方なく開業７ヶ月後に小さな看板を駅改札を出たところに掲げた。

通勤は痛勤

大学病院だけでなく①平塚共済、②神奈川県立がんセンターにも勤めたが、26年間の勤務医生活のうち①＋②で20年間を占めた。自宅から①は26km、②は20kmと遠かったので開業場所は自宅に近い場所を探した。お蔭で今は通勤距離4.5km、所要時間15分なので体が楽であるし、ガソリンが値上げされても余り気にならない。高速道路を走らなくて済むようになったことで、ストレスも減った。開業すると運動不足で肥満になるとも言われているが、相変わらず食欲が増進しないため体重は一向に増えず中年太りとは無縁で、なんと高校生の時よりも軽量である。

低収入は気楽

収入が低けりゃ節税にエネルギーを注ぐ必要もなく、周囲には妬まれず、税務署に目をつけられず、いい事尽くめである。税理士に依頼するのも自由であるが、うちも含めて収入が一定以下の診療所では税理士なしでもやっていけるような税制になっている。

従業員雇用時の面接には予想より大勢が応募してくれたが、面接に立ち会うと、２度と顔を合わせたくない人が7割以上を占めた。自分で自分が判っていない人が多いのだ。それでも良い人はいたので採用したところ、よく働いてくれた。しかし半年経ったら２人揃って辞表を持ってきた。それで補充の人を雇ったが、怒鳴ったわけでもセクハラした訳でもないのだが、また半年で辞めてしまった。そう言う

訳で写真のメンバーがオールスターである。「両手に花でウハウハ」と見えるかも知れぬがそう気楽でもない。経営者は辛いのである。

開業医になったが……

定年がないのは「辞めなくとも良い」と言うより「ずーと働かねばならない」のだから、いい事ばかりでもない。私の父は企業のサラリーマンだったが、60歳で定年退職してからはまったく働かず、陶芸に油絵に囲碁を趣味とし、戦友会や幼友達との交流を密とし、夫婦での海外旅行（ハワイ、グランドキャニオン、ナイアガラ、パリ、タイ、香港、中国……等）にもしばしば出かけた。実に羨ましかった。両親は享年81歳と79歳で鬼籍に入ったが、足りなかったのは貯えではなく、健康と寿命であった。父は早死にではなかったが、晩年７年半は脳卒中の後遺症の状態であり、最後は寝たきりで意識は殆どなかった。母は父の死後「苦しまずに早く死にたい」が口癖だったが３年後にスキルス胃がんで死去した。病名が判明して１ヵ月後だった。

大学の後輩の中には開業後張り切りすぎて体を壊し、若死にした人も複数（他科）いるので無理してアクセク働く勇気もない。しかし「患者が来過ぎたら……」などという危惧は実に見当外れであった……と妙に納得しつつ、今日も愛車に乗って診療所に向かう。

開業半年までを振り返って

内藤静夫
内藤皮ふ科（湯河原町）

平成18年４月24日、湯河原駅前で内藤皮ふ科を開業致しました。まだ開院して半年たらずで開業について書くのはたいへんおこがましいことと思いましたが、先輩の宮本秀明先生からのお勧めがありましたので、皆様の参考になるかわかりませんがこれまでの経過を振り返ってみたいと思います。

私は神皮第12号の「私の趣味」の欄に「仏教遺跡遍歴」と題して投稿させて頂き、その中に私の履歴にも若干触れさせてもらいましたが、今回の開業の話にも関係がありますので少し述べさせて頂きます。私は昭和29年静岡県掛川市生まれで、昭和56年横浜市大卒です。卒後、国立熱海病院に約10年、小田原市立病院に約６年勤務致しました。これらのことから私は静岡県を第１の故郷、神奈川県を第２の故郷と思い、開業するなら両県の境界地域にしたいと思っておりました。そんな折、平成17年７月、湯河原駅前ビルの２階のテナントがあき、同じ２階で既に内科を開業している友人の川越三洋先生から開業のお誘いがあり、これは「渡りに船」だと即決してしまいました。それからは、教授へのあいさつから始まって、型通りに少しづつ開業準備をして参りました。

私の目標は、開業しても勤務医時代とほぼ同じ診療と生活ができることでした。このことは開業半年経った今、ほぼ達成されております。ですからこの時期にこの湯河原に開業できて本当によかったと思っています。ただしこの開業にも、いろんな縁やタイミングが必要でした。開業準備に関しては、１階にある調剤薬局のＴ氏のお世話になりました。内装業者は２社の見積もりから小田原の建設会社に決定し、医療についてはスズケンに御願いすることとしました。開業資金についてもわりとスムーズにさがみ信金から借りることができました。あとはレールの上を滑っていくように開業準備を進めていくことができました。電子カルテは使用せず、サンヨーのレセコンおよびドクター支援システムを使用することとしました。従業員については熱海時代の知り合いの２人の事務と１人の看護助手をお願いすることとしていましたが、看護助手については開業直後やめることとなってしまいました。それもすぐに看護師が見つかり、むしろ今ではいいこととなってしまいました。こんな風にして、４月24日初日の73名を何とか乗り切り、以後順調に患者数は伸び、半年経過した10月24日には新患数が3000名を越しま

した。これからはカルテの新たな保管場所を作る必要に迫られていますが、電子カルテを導入する予定はありません。

なんだか取り留めのない話になってしまいましたが、とにかく何とかこの半年で、ここ湯河原で皮膚科開業医としてやっていける地盤が確保できたと思っています。今後も私が仕事を出来得る限りは当地で頑張っていきたいと思っておりますので、宜しくお願い致します。神奈川県の最西端に位置するここ湯河原ですが、万葉集の頃からある良質の温泉もありますので、当地にお越しの節には、駅前にありますわが内藤皮ふ科にもお立寄り頂きますようお願い申し上げます。

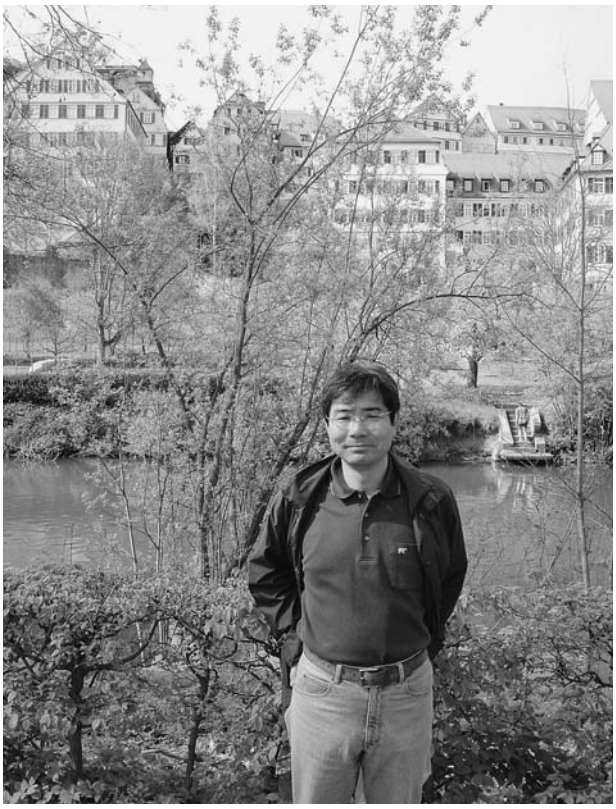
開業して

小野秀貴
おの皮ふ科クリニック
（茅ヶ崎市）

平成17年６月６日より、茅ヶ崎駅の南口で開業しました。約半年前に開業を決意し、当初５月で茅ヶ崎市立病院を退職し６月中旬に開業を考えたのですが、横浜市大の医局の人事にあわせて３月で退職し、２ヶ月休養して６月初めに開業予定としました。休養中１ヶ月くらいヨーロッパをのんびりと旅行したり、あちこち国内旅行もしようと、あまい考えを持っていました。

１月に、以前より開業を勧めていただいていた医師会の先輩の先生の紹介で、現在の場所に開業を決めました。１階がビルのオーナーの薬局で２階に循環器の先生が１年前から開業されている３階建てのビルの３階でした。２月から建築士の方と設計の打ち合わせに入りましたが、建築士の方と意気投合してしまい、まだ時間に余裕があるつもりで、のんびりと週１回のペースで居酒屋で楽しく打ち合わせを重ねました。できるだけ医院らしくない内装を目指し、待合室は間接照明と曲線状の木目調のカウンターなどにし、クリニックがうまくいかなければカウンターバーに変更できるのではないかという感じになってしまいました。結局長々と設計の打ち合わせに時間をかけてしまい、内装工事は４月になってやっと始まりました。設計の段階でいろいろ出来上がりを想像しながらあれこれ考えるのもなかなか楽しい時間でした。

電子カルテの選定ではいろいろ調べてみましたが、種類が多すぎ全てを検討するのは不可能で、数種類をピックアップしてみましたが、ほぼ性能は大



差なく、結局、営業の熱意と開業支援をやってくれるメーカーに決めました。電子カルテの診療には不安もありましたが、開業前のプログラムの準備を始めると、自分の使いやすいように改良を重ねたり、少しでも時間の短縮ができるように工夫したりしているうちにゲーム感覚で楽しみながら慣れてしまい、問題なく導入できました。

そうこうしているうちに、４月も中旬になり受付け、看護師のスタッフも決まりゴールデンウィーク中はやることもないので、最初１ヶ月を予定してい

た旅行を２週間に短縮してドイツ、スイス、南フランスを中心に旅行に出かけました。以前留学していたドイツの研究所も訪れたのですが、教授はすでに退官され研究室も閉鎖されておりひっそりとしていてさびしいものがありました。その後、アルル、ニース、モナコなど南フランスをめぐり最後にスイスアルプスで命の洗濯をして帰ってきました。帰国後、予想通り（？）メーカーがゴールデンウィーク期間中休業だったためドアなどのパーツが搬入されず、内装工事は旅行前の状態からほとんど進展なく、机などの備品の搬入もできない状態でした。元々工期に２週間の余裕をとってあったので最初は心配しませんでしたが、結局、開院直前まで工事がかかり、最後は突貫工事でなんとか体裁を整え、無事開院にこぎつけました。

開院後は周辺の諸先生方のご支援もいただき、何とかやっておりますが、診療時間中に昼寝の時間もとれるほどのんびりと診療しており、最初は骨休めができるとよろこんでいました。このままずっと骨休め状態が続くのも考えものではありますが、今後ものんびりと続けていければと思っております。よろしくお願いいたします。

井の中の蛙大海を知らず

下島博之
しもじま皮膚科クリニック
（藤沢市）

平成17年９月に、14年余り勤務した日本大学医学部附属板橋病院を退職し、暮れも押しつまった12月20日に江の島を臨む藤沢市片瀬にて開業いたしました。大学病院を離れて１年余りですが、ずいぶん遠い昔のことのように感じられます。

大学では悪性腫瘍、特に悪性黒色腫の早期診断（ダーモスコピーなど）を研究テーマとしていました。また、通常の診療に加えて皮膚外科に携わり、多くの手術を経験させていただきました。私が入局した当時の主任教授、故森嶋隆文先生はとにかく厳格な先生でした。教授回診、症例検討会、病理組織検討会では学生や若い医師たちを震え上がらせ、怒鳴られて泣き出す者、あまりの恐怖に卒倒する者もおりました。私の研修医時代の目標は、その日１日どうすれば教授に怒られずに済むかということに尽きました。それでも、ごくまれに与えられる先生のお褒めの言葉が大きな励みになりました。怠け者の自分が一人前の皮膚科医になれたのはあの頃の厳しい教えがあったからこそと感謝しています。

私は長野県の山あいの小さな町に生まれ育ちました。父は外科医ですが、田舎の診療所では標榜科はあってないようなもので、内科、外科、整形外科、小児科、皮膚科、ときには獣医をこなさねばなりません。「コロの骨が折れとるかもしれんで診とくれ」

というご近所のリクエストにお応えして、犬を押さえつけてレントゲンを撮っていた父の後ろ姿を思い出します（今考えるとコストはどうしたのだろう……）。住宅の１階が診療所、２階が自宅で、電話回線は１つだったので毎日が当直同然で、「昨日は３回も起こされた」といった両親のぼやきを何度も耳にしました。休診日も少なく家族で旅行をした思い出もあまりありません。そんなわけで地元の高校を卒業して上京するまで、海を目にしたのは数回、海水浴は未経験でした。大学時代に友人と江の島や鎌倉を訪れ、その景観、風情に感激し、将来こんな所に住むことができたらと憧れを抱きました。開業を決意したとき、実家に帰ることも考えましたが、過疎化の進む小さな田舎町で皮膚科のみを標榜する

ことはきわめて困難という結論に至りました。そんなときに知人から当地を紹介され、学生時代の思いがよみがえりました。春３月、雲一つない晴天の暖かな休日に江ノ電に乗って見学にでかけ、江の島と富士山の美しさ、海風の気持ちよさに感激し、当地での開業を決意いたしました。

クリニックは住宅地に囲まれています。患者さんはお年寄りや奥様方、子供と母親が多く、みなさん穏やかで、いつも笑顔で診察することができることに大きな喜びを感じます。それとともに、大学病院の殺伐とした外来診療を思い出します。外来医長は苦情処理係長、外科手術班班長は科の手術全体の責任を負わねばなりません。手術前の説明を聴き終えて退席する患者さんが、懐に手を入れて「カチッ」とテープレコーダーの停止ボタンを押す音が耳に入ったときのいやな気分は未だに忘れられません。

最近はご家族、親類で来てくださる患者さんが少しずつ増え「先日は孫が大変お世話になりました」とお話を切り出されるお年寄りにたびたび遭遇するようになりました。同姓であれば何とか察しが付きますが、娘さんの嫁ぎ先で、姓が違ったりするとほとんどお手上げで、「あぁ……あっ！、はいはい！」といった、苦し紛れの返答が多くなります。患者さんが帰られた後に慌ててカルテを引っ張り出して家族関係を確認し、カルテの隅に「○○ちゃん（AD)、孫」などと記載し、次回は「○○ちゃん、よくなりましたね！」とこちらから切り出せるように心がけています。地域の方々の家族関係が顔を見た瞬間に思い出せるようになったとき初めて、片瀬の開業医として認められたことになるのだろうと考える今日このごろです。

柱の傷

大林寛人
大林医院（小田原市）

いまはもう秋……。

「だれもいないうみ～」、と心の中で口ずさんだ方。……同世代です。

夏の間、玄関に、所狭しと６個程置いてあったカブトとクワガタムシの飼育ケースが、ひとつまたひとつと減ってゆき、ついにクワガタのメスが１匹残るだけになってしまった。飼い主であるはずの小学校２年の息子は、もはやえさのゼリーをやることすら忘れていたりする。……秋の深さ、冬の訪れを感じると同時に、やはりどの世界でも結局はメスのほうが強いのだと、軽いため息ついたりしています。

埼玉から、小田原へ戻ってきたのが、「あー、春だったねー」。

あっという間に、もう半年以上たってしまいました。あァそれなのに、埼玉の家の引越しがまだ完了しません。月々の家賃だけをむなしく払っているおろか者です（毎水曜日に埼玉医大の診療を手伝っているので前日の宿泊には利用していますが)。子供たちの思い出のガラクタが捨てられないのです。自分の本などは、もうほとんどいいのです。そう、ブック・オフで。小物は少しずつ運ぼうなどという甘い考えは捨て、ついに、プロに頼もうと心に決めたこの11月、です。

初めまして。大林寛人と申します。埼玉医大卒。池田（重雄）塾で母斑・腫瘍・皮膚外科を、土田（哲也）塾で膠原病はじめgeneralを、そして小島理一先生からは現代日本皮膚科学の歴史・流れを、肌で学ばせていただきました。

祖父が皮膚・泌尿器科として小田原の地に開院してからはや80年（昭和２年～)。大林医院も老朽化が進み、父も80、自分も50（もうすぐ)。建て替えるならもう今しかない、ということでこの度、家を建て直し小田原に落ち着くことにいたしました。

「あれは３年前――」平屋の診療所と、同じ敷地の木造２階建ての住まいを、まずは診療所から、続いて住まいの順に建て替えました。

ひとことで書いてしまうと実にあっけないですが、着工するまでに10年、着工から完成まで３年と、だらだら時間がかかりました。何といっても、「思い出がいっぱい」の家を壊すこと自体が、勇気とパワーのいることだったのです。

木が切られ、塀がなくなって建物が丸見えになったと思ったら、木造平屋建ての診療所は、あっという間に消え去り、更地になりました。そこに建った新しい診療所は、太い鉄骨を何本も沈めるすごい基礎工事で始まりました（平屋なんですけどね）。

診療所が完成し、次は住まいのほうです。「柱の傷は……」と言えばやはりおととしの、と続くでしょう。ちょうど一昨年の秋、築80年の家に別れを告げたのでございます。大正から昭和初期の典型的なつくりで、廊下に囲まれた中に居間と座敷がある、いわゆる中廊下式と呼ばれるもの。床は高く、便所も広く、２階には書院造りがありました。

解体の日の様子を父が写真に撮っていましたが、その心中やいかに。ま、「胸キュ～ン」ですよね。そこには父とその兄弟、僕と妹、そして僕の娘・息子、という３代にわたる子供たちの背比べのあとが柱に刻まれていました。とっておいてほしかったけれど、残っているのは写真だけ。思い出の柱はもうありません。

さて、現在僕は、月、木、金、土曜日に外来診療をしています。父も外来に出て、マイペースで診察を行います。以前、医局の先輩に、「お父さんとやるの。そうか、それは大変だな！」と言われたことがありましたが、診察面では、お恥ずかしいですがそう患者も多くないこともあり、ストレスは少ないと思います。

ただ、大林医院にはレセ･コンもありません。建て替えを期に電子カルテを導入！もあったのに……また乗り遅れました。月始めには、信じられないでしょうが、レセプトをすべて手書きでやっています。子供の頃、「保険書き」と呼んで両親がやっていたのを思い出しますが、年々複雑になる計算に眼をしょぼしょぼさせながら毎月、老夫婦がいまだ同じやり方でこれを続けているのです。なんということでしょう。ボケ防止にはいいかもしれません。また、点数把握の修練にはなりましょう。しかし、これはつらい……。そんなわけで（政府にもせかされるように）、いつ機械を入れるかが懸案となっているところです。

日常生活では30年ぶりに自分の両親と生活するようになり、何がいやかといって、よぼよぼした父の姿を見ることです（ちょっと表現がキツかったかもしれません）。丸く曲がった背中で弱々しく歩く父の姿や、食事のとき「こういう姿勢で食べてはいけませんよ！」と子供に言ってしまいたくなる父の格好などを見ると、どうにも情けないつらい気分になります。しゃきっと、居合いなどしていた昔の姿を追いかけてしまうのです。それに比べ母は、３年前に大病をしたにもかかわらず明るく元気でよく笑います。父とは7歳離れているとはいえ、うーむさすが女性強し！と感じるのです。しかし、自分がこの歳で大学に行くことができるなどとは本当に感謝しています。ぜひ孫の晴れ姿など見られるまで長寿を願います。

引越しがちゃんと済み、小田原に落ち着き、趣味の時間が出来たなら、またギターを弾いたり歌ったりしたいと思っています。いままで、クリスマスや春の頃に、大学病院のロビーで入院患者のためのミニコンサートを数回やりました。大学のすぐ近くにあるライブハウスの経営者と親しく、頼めばちょちょっと音響を準備してくれて、演奏もしてくれる気楽さもありました。

今後、県皮膚科医会にもなじみ、JIMPI BANDとも遊んでいただけたらと思います。とにもかくにも、まずは、一刻も早く引越しを完了したいと思う今日この頃であります。これからどうぞ、よろしくお願いいたします。

――2006・秋――